

米国核医学会（SNMMI）2025 印象記

植竹 修士
Uetake Tomonori

1. 大会概要

2025年6月21～24日まで、アメリカ・ルイジアナ州ニューオーリンズにて、SNMMI 2025 Annual Meeting（米国核医学会年次総会）が開催された（写真1）。SNMMIは、核医学・分子イメージング分野における世界最大級の国際学会で、本総会では約7800人が参加し、口頭発表が376件、ポスター発表が974件にものぼった。本年のテーマ「Accelerating the Cure（治療の加速）」に相応しく、¹⁷⁷Lu や²²⁵Ac 等のRIを用いた治療薬剤の成果に関する講演が多数発表されていた。また、国家間、企業間、業種間の連携の重要性に焦点を当てた講演も印象的であった。早朝7時前から開始される講演や夜8時を過ぎても続いている講演もあり、早朝にも関わらずほぼ満席近くになっていた会場も見かけられ、驚くと共に参加者の熱意と関心の高さを感じた。更に、講演会場だけでなく、展示ホールや通路でも活発な議論が交わされており、本分野の広がりと熱気を肌で感じることができた。

展示ホールには、200社以上の企業が出展し、放射性医薬品、PET/CT装置等の医療機器、GMP設備等、幅広い技術が紹介されていた。なかでもNovartis、Lilly、Telix等の放射性医薬品企業の出展が目立ち、以前から大々的に出展していたGE HealthCareやSiemensといった装置メーカーはスペースこそ広く取られていたものの、若干医薬品企業に押されているようにも感じた。

開催地ニューオーリンズは6月にしては蒸し暑い気候であったが、街に流れるジャズや歴史的な街並みが印象的で、国内外からの観光客も多く、国際会議にふさわしい雰囲気を醸し出していた。



写真1 SNMMI会場外観

2. 畑澤順氏のKuhl-Lassen Award受賞講演と日本からの注目発表

本総会で印象深かった講演の1つに、筆者が所属する日本アイソトープ協会（以下、協会）の副会長でもある大阪大学の畑澤順氏におけるKuhl-Lassen Awardの受賞記念講演があった。本賞は、脳機能画像研究において顕著な功績を挙げた研究者に贈られる国際的に名誉ある賞で、日本人としては2001年の米倉義晴氏（現大阪大学招へい教授）、2006年の箕島聰氏（現ユタ大学）に続き、約20年ぶりに3人目として畑澤氏が受賞された（写真2）。

受賞講演では、PETとSPECTを用いた脳代謝・血流の可視化、可塑性、双子研究による遺伝と環境の影響分析等、多角的な視点から人間の脳にアプローチした研究成果が紹介された。

講演後、畑澤氏は、「まるで夢を見ているようでした」と発言され、感慨無量の様子が印象的であった。筆者も協会職員として、受賞講演の場に立ち会えたことは大きな誇りであり、今後の励みになる。



写真2 Kuhl-Lassen Award 受賞（畠澤氏）

改めてお祝いを申し上げたい。

その他、SNMMIと日本核医学のジョイントセッションでは、北海道大学の小川美香子先生と福島県立医科大学の志賀哲先生が講演され、²¹¹Atに関する研究成果を紹介されていた。小川先生は、放射線が免疫に与える影響や免疫の力を活用した治療の可能性について、志賀先生は、²¹¹At-MABGの国内臨床試験の進捗や小児がんへの応用の展望等を紹介された。また、大阪大学の渡部直史先生による講演が複数あり、²¹¹Atを使ったFirst-in-Human試験の報告や、日本国内における²¹¹Atの製造・供給体制の整備状況について報告されていた。

これらの講演を拝聴し、新たながん治療の可能性を確認すると共に、日本の研究が国際的に連携しながら進められていることを改めて感じることができた。

3. 資料を用いた協会の活動紹介と対話の場

日本核医学のご厚意でブースの一部をお借りし、協会英語版パンフレットや医学・薬学部会で実施した第9回全国核医学診療実態調査報告書及びそのダイジェスト資料を用いて、協会の活動について



写真3 日本核医学会ブースでの広報活動

広報した（写真3）。展示期間中、研究者や他の企業ブース出展者を含め約150名の訪問があった。「日本の核医学の状況はどうか」との質問もあり、筆者の拙い英語での対応であったが、真摯に話を聞いてくださいり、日本の情報をもっと積極的に世界に発信すべきだと感じる貴重な経験となった。また、他の企業ブース（主に非営利企業ブース）も訪問し、意見交換や情報収集を実施し、今後の国際連携や協会活動への参考となるよい機会となった。

4. まとめ

SNMMI 2025への参加は非常に刺激的で、多くの学びを得る機会となった。世界各国の臨床・研究・制度の取組みを目の当たりにし、核医学のステージが「診断」から「治療」へと展開していることを実感した。放射性医薬品による新しい治療法の台頭と共に、医療職種間の連携、更には企業や国を超えた協力体制の重要性も再認識した。

次回は2026年5月30日～6月2日の日程でアメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルスにて開催される。こうした国際会議の場で、日本の核医学・アイソトープ分野の研究成果を世界に発信することで、その存在感を更に高められることを期待すると共に、協会職員としてできることを考えていきたい。

((公社)日本アイソトープ協会)